

『仕事漂流10年史』

柳沢 奈美（筑波大学 生物学類 平成8年度卒業）

10年程前に生物科学研究科（当時）修士課程を修了後、私は就職することになりました。研究者になろうと思って大学院に進んだものの、思うような成果も出せず実験も失敗ばかり。「こりゃ、どうしようもないな。」と思い、就職活動を始め、特に将来に対する展望もなかったため、製薬会社、食品会社やシステムエンジニアなど、無軌道に会社説明会など出かけ、最終的に私が選んだ就職先は、映像制作会社でした。

▶ 「ビデオ見させて下さい。」

その会社のホームページには、制作実績として、『科学医学映像』とありました。どんな映像かさっぱり想像できませんでしたが、『科学』とか『医学』とか、理系っぽい雰囲気なので、自分をアピールしやすいかなと思いついてそこを受けることにしました。

「科学を伝える仕事がしたい。」面接で言ってみました。それが本心かどうかはともかく。

事前に会社見学に行った時、その役員らしきおじさんと、どんな経緯か忘れましたがサシでみっちり二時間くらい世間話をする羽目になりました。内容はほとんど覚えていませんが、確か就職氷河期と言われていた当時のご時世トークだったと思います。その中で、ありがたいアドバイスをいただきました。「こういう時はな、『ビデオ見させて下さい』とかなんとか言って、何度も通うんだよ。」じゃあ、ということで素直に言われた通り、「ビデオ見させて下さい。」と言ってその会社を繰り返し訪問し、ビデオを見ながら、その他何人もの社員・役員の方々と話をする機会をいただきました。

こうやって何度も通うことで、私の唯一自慢出来る能力『初対面のおじさんともサシで二時間会話が続く能力』、平たくはコミュニケーション能力とも言いますが、それをアピールすることができたのは収穫だったようです。やはり面接で学生に与えられる時間は限られたものです。実は面接当日、私は突如不慮の眼病に見舞われ面接を延期させてしまいました。そのことで私の入社を強固に反対する社員がいたそうです。しかし、面接前に既に顔見知りとなっていた並み居る役員達の推薦に、私の入社が決まったそうです。

これは、社員数約30人程度の小さい会社だからできたことだとは思いますが。会社側もたくさんの学生を相手にしているので、一人一人に個人的な会社訪問を許すと収拾がつかなくなってしまい、その煩わしさといったらありません。もし同様の会社訪問を考えている学生の方は、そのへん大人の節度を持って、相手の顔色を伺いつつ、そういうことができるか率直に聞いてみるのが良いと思います。会社によってはインターンシップをやっているところもあるようです。これは『仕事』を知るにも『職場』を知るにも、本当に良い機会ですね。私が就職活動をしている時には全く念頭になかったのですが、もし知っていれば就職活動も変わ

っただろうし、面接時も積極的にその体験をアピールしていたと思います。

▶ 「ニッチだ。」

さて、入社したのは良いのですが、『映像制作』と言われても具体的な仕事は全く想像が付きません。入社当初は何をやっているかわからず、緊張した毎日を過ごしていました。「表をつくれ。」「これ買ってこい。」言われたことを「はい、はい。」と言って必死でこなすことしかできませんでした。徐々に仕事内容が分かってくると、『制作進行』とか『プロダクションマネージャー』という肩書きをもらって、映像ができていくまでのスケジュール管理や、カメラマン始め撮影スタッフやスタジオの手配、その他発生する諸々膨大な雑用業務をこなすようになっていきました。

私がこの会社に入る前触れてきた映像は、映画、CM、テレビ、そんなもんです。いきなり『科学医学映像』と言われても、全くイメージが湧かずに「ま、いっか。」と思って適当に入社しました。で、驚きました。製薬会社のMRが販促用に持ち歩くクライアント向け薬剤紹介DVDとか、国からの予算で進行している研究プロジェクトの成果ビデオ。「光エネルギーを受けて励起状態になった電子が……、フェルミ粒子とボーズ粒子の間には……。」といった誰が見るのか見当もつかないG難度な映像などです。まさに隙間映像。ニッチです。でもこんなニッチな映像の世界に興味を持ちはじめたのも事実です。

やがて私も科学映像のシナリオを書くことになりました。やっぱりニッチな感じで、メダカの遺伝子に関する研究の成果ビデオ、数社で受注を争うコンペものでした。書類審査を通過し、ひやひやの新人ディレクターとして会社の巨匠達に囲まれプレゼンの練習をしている時、卒業研究の発表時、指導教授に言われた言葉を思い出しました。「原稿を覚えて自分の言葉で話さない。」立て板に水を流すように滔々と話すだけでは、伝わらない。『伝える』という当人の意志が『伝わる』ことにつながるのだと、あの言葉を思い出しながら、改めてプレゼンテーションというものを考えました。その言葉が功を奏したかどうかはわかりませんが、見事受注することはできました。

▶ 「そして漂流。」

そんな風に私を育ててくれた会社も3年で辞めてしまいました。人と仕事の広がり限界を感じたからです。なんて書くと偉そうに聞こえますけど、ここまでたった3年。たいした実績もないのでディレクターの仕事なんてありません。知人の紹介で、プロデューサー兼社長が1人だけでやっている小さな会社に転職しました。もちろん転職せずに、科学映像のディレクターとして研鑽を重ねていく選択肢はありました。一人前っぽく引き止めに

も合いました。この時の転職は正しかったかどうかはわかりません。ただ、科学映像からは遠ざかり、かつ制作進行の仕事がメインとなったものの、モーターショーの展示映像やデジカメのCMを作ったり、人と仕事の幅は随分広がったように思います。

そして数年でそこも辞めました。諸事情重なった上での辞職ですが、その理由の一つには、関連会社のお局さん達から軽く中学生日記のようないじめに遭ってしまったこともあります。挨拶しても無視されたり、何か問題が起これば私のせいになったり、1mm のミスでも鬼の首を獲ったように責められました。友達はいたのでそれほど絶望的にはなりませんでしたが、何かプロジェクトが進んでいる間は毎日のように会う人たちです。「人間何オになってもこういう部分は子供と変わらないなあ。」と実感しましたが、この状態が続くのは正直イヤなので、打開策を考えようとは思っていました。

また、社長一人、社員は私（正確には正社員ではない）一人、プロジェクトごとに必要なフリーのスタッフを集めて仕事をする、そんな会社だったので、社長と二人きりで仕事をする時間も長く、若干の閉塞感を感じはじめていたことや、その他諸事情が重なり、気づいたら『転職』の2文字が頭にこびりついていました。そこで考えたのは、「次は、仕事内容よりも人間関係を含めた職場環境を重視して転職しよう。」ということでした。そんな時、知人の紹介で別の会社の仕事を手伝えることになりました。一緒に仕事をする中で、潤沢な予算の大きな仕事は減りそうだけれど、ここの職場環境ならば続きそうだと思えたので、流れでそこに転職することになったのです。

こうしてすっかり漂流人生になってしまいました。新しい職場での雇用形態はフリーランスです。事務所には自分の机があり、毎日のように通ってはいるものの、仕事さえこなしていれば出社しなくとも誰も文句は言いません。固定給ではなく作品ごとにお金をいただくので、月によっては収入ゼロなんて時もあるけれど、もちろん結構頂戴する時もあります。『仕事=収入』という図式が明確なので、仕事に対する考え方がシビアになった気がします。

新卒で入った会社でお世話になった先輩は、独立して別会社を作り、最近ではそこから仕事をいただくこともあります。また、仕事を通して知り合ったディレクターやCGデザイナーの紹介で、新たな会社から仕事をいただくこともあります。しばらく離れていた科学系や医学系の仕事も、ぱらぱらと入るようになりました。小さなものばかりですが、人のつながりが仕事につながっていくことに、日々ありがたさを感じています。

▶ 『考えぬく力』

「ディレクターに必要なものは何だと思う？」と、ある先輩に聞かれたことがあります。私が答えに窮していると、それは、「考える力だ。」と言われました。その時は、抽象的すぎてわかったようなわからないような複雑な気持ちになりましたが、それから数年が経ち、色々な経験から自分なりに理解をしていくと、どちらかと言えばそれは、『考えぬく力』だと思うようになりました。シナリオを書く時、編集する時、スケジュール管理、交渉、手配、その他諸々。映像制作だけではなく、あらゆる場面で業務を完遂させるには、諦めず集中して『考えぬく』ことに尽きるなあ、とつくづく思います。

でもただ考えるだけではダメで、そこに論理がないと何にもなりません。「映像制作をしている。」と言うと、「クリエイティブな仕事なんだ。」とよく言われます。確かにクリエイティブな要素は必要で、そのあたりに自分にとって目下の課題であることも事実ですが、それ以上に必要なのは、『論理的思考』だと最近思っています。シナリオは、理屈です。ストーリーの構築にも、カットとカット、言葉と言葉をつなぐにも、理由が必要です。細部から全体に至るまで、そこには必ず論理が存在します。内容のみならず、作品を制作するための、計画、運営、完成までのプロセスは全て、論理的思考と諸々の決定のためにいかに『考えぬける』かにかかっています。そしてそれはビジネスの基本だったりもします。「研究のプロセスと同じじゃん。」と、ある時気づきました。なんだ、もっと真面目に研究やっておけばよかったなあ、そうすれば社会人のスタートラインが随分違うところになっていたんだろうなあ、と後悔ばかりです。

▶ 「積み重ねてくれた。」

まあでも後悔ばかりしていても仕方がないので、今は仕事の中で勉強をさせてもらおうと、目の前のことに必死に向かっています。思えばこの約10年、漂流を繰り返すごとに新たな経験を、随分成長させてもらいました。正直相当しんどい時もありましたし、理不尽な要求もたくさんありましたが、そのたびごとに成長を感じることができました。つい最近仕事で、あるスポーツ選手にインタビューをしました。その中で、印象に残った言葉があります。「懸命に悩みながら練習していると、ある日突然それができるようになる。次の日にはできなくなることもあるけれど、それを繰り返しているうちに必ずそれができるようになる。それを積み重ねてくれたので、前向きに進むことができました。」もちろん私は彼のように高いレベルまで積み重ねることは一生かかっても無理なのですが、漂流し、様々な経験を積み重ねて成長できた私にも、その言葉はすごく腑に落ちたのです。

Communicated by Jun-ichi Hayashi, Received November 30, 2009.

Revised version received January 13, 2010.